

# 良心専売店

## 良心売り

紫雪 (訳 萩田麗子・横田勤)

ありとあらゆる苦しみを味わった中で、私はある重要な決定を下した。**良心**を売りに出すことにしたのである。生活が苦しいからでなく、私は生きる事にたいへん疲れたからである。たいへん疲れた原因は、私の良心があまりにも多かったことにある。

貧しい子供が学校に通いたいだろうと思い、私は名前を隠してある山村の小学校に 5000 元寄付した。そしたら親しい友達は私を馬鹿にした。

一人の老人がだれかのバイクにぶつけられて転び、顔は血だらけになり、地面に横たわっていた。だが道行く人はだれも助けようとはしなかったので、私は彼のところにかけて行って抱き起こし、病院へ連れていった。ところが老人の家の者がやって来て、「あなたが自転車に乗っていてぶつかったのだ、もし何の関係もなければ、こんなに親切にするはずがない」、と言い張った。その老人は気がついたが、いい加減にうなずいているだけだった。

私は親孝行の子どものように、毎日その老人に食事やスープを届け、おまるを抱えて運び、その上に入院費もまるまる払った。他人は私のことをバカだと言い、私自身も自らを心の中で罵った。このことがもとで 10 年間連れ添った妻は私から離れていった。あなたには私の苦しみが体得できるだろうか？

私は通りに立って自分の**良心**を売った。最初は野次馬が多いだけでだれも買わ

なかった。私は胸に看板を掛けて**良心**の長所を大げさに宣伝した。何人かの老婦人は、ひょっとしたら私に同情したのかもしれない（そのとき私はいくぶん落ちぶれたかっこうをしていた）、私から少し**良心**を買った。値段を高くしなかったので、そのあと買う人はだんだん多くなった。

商売をして大金を稼いだ者や権力を握った者や、意外なことに浮気をしている男や女が、「家に帰ったら妻や夫に優しくしなければいけない」と言って買っていった。

私は、ちかごろは**良心**がこんなにも不足していたのかとたいへん驚いた。物は希少であれば高い。私は急いで価格を十倍、二十倍に上げた。大事な時になると私の聡明さはいつも私を助けてくれた。私の中に**良心**が少なくなると、私の心はそれほど優しくはなくなった。

私はときには話し方や顔つきから人の心を探り、法外に吹っかけ、猛スピードで売り値を吊り上げた。

私は通りで声を張り上げて売るのではなく、一軒の風格のある構えの店を借りて、**良心専売店**の金文字の看板を掛けた。足を組んで腰掛け、お茶を手にして客がやって来るのを待つ。——全市内でただ一軒しかないこのような店で商売をやるのは気分が良かった。

妻がいなくなって私は新しい配偶者、つまりお金を得た。私は小さな洋風のビルと白い車を買ひ、若いお手伝い兼セックスフレンドを雇った。酒屋を開き、もっぱら偽物の酒を売っている。

なぜなら、私には**良心**がたいへん少なくなったからだ。

ある日、木綿の上着を着た善良そうでおとなしい農夫が、恥ずかしそうに店に入って来て、辛そうな顔をして言った。「妻は4人の女の子を産んだが息子を産まなかった。たいへん怒っていつも妻を殴ってうっぷんを晴らしていた。それで、良心をちょっと買って、これから妻に少し良くしてやろうと思っている。」

私は長いあいだためらったが、ちょっと安くして彼に売ってやった。なぜなら、私にはまだ少しは**良心**が残っていたからだ。

最後になった少量の**良心**を売るべきか売らざるべきか、私は店を閉めて何日間か熟考した。そして最後に、やはり売ることに決めた。良心の無い者だって得意げに生きているじゃないか？

店を開けるとすぐ、堂々たる風采の幹部のようなようすの人物が入ってきた。

顔を見るやすぐに涙を流して大声で泣きだした。

彼は長年工場長をやってきて、公金で飲み食いし、遊び、まともに仕事を処理しなかったのが工場をつぶしてしまっ、従業員を解雇したのだと言った。彼は大変苦しんでいて、解雇した長いあいだ働いていた工員たちののために少し良い事をして、罪滅ぼしをしたいと思っていた。私は、**良心**が最後のほんの少しになったので、自分のためにとっておくつもりなのだ、と言った。彼は私の手を握り、けんめいに哀願して高値で買うと言った。高値と聞いて私は元気づき、テーブルを叩いて言った。「売りましょう！」

店じまいをしようとしていたちょうどそのとき、前に来たあの農夫がまたやってきた。顔じゅうが悲しみと憂いに満ちていた。前回よりはさらに憔悴していた。彼が言うには、前回少し**良心**を買ったあと家に帰ると、折り良く、痩せて弱々しい妻が水を担ぎながら、苦勞しながら山の坂を歩いて帰ってくるのが見えた。妻を手伝って水を担ごうと思い、すばやく迎えに出た。すると、なんと彼女は、夫が走ってきてまた自分を叩くのだと思い、驚いて坂の上から転がり落ちて、不幸にも亡くなってしまった。彼はむせび泣き続けて話すことができなくなった。彼はもう少し**良心**を買って、過ちをちゃんと悔い改めようと思っていたのだ。

私は彼にウソをついた。「最後に残ったやつだから 10 万元だ。」彼は、「どこにそんな金があるんだ、家に帰って家売ったとしても、多くても 2 万元になるだけだ」と言った。「それじゃ 2 万元でいい、しかしまず手付金として 1000 元だ」と私は言った。彼はポケットをまさぐったが 350 元しかなかった。私が「それで手を打とう」と言うと、彼はしきりに礼を言い、よろよろ歩きながら行ってしまった。私はひそかに笑った。「明日あんたが来たとしても、もうおれはいないよ。果てしない人混みの中でおれを探し出すことなんかできやしないさ。どっちみち、おれはもう**良心**を無くしてしまったんだ。」

(『中国微型小説排行榜 2012 年』百花洲文芸出版社、南昌市、2013、pp. 214-215.)

（中国語原文）

## 卖良心

紫雪

万般痛苦之中，我做出一个重要的决定：出卖良心。不是因为我生活贫困，而是我活得太累了。太累的原因，是我的良心太多了。

穷孩子想上学，我隐去姓名，寄给一所山村小学 5000 元钱，亲朋好友骂我是傻帽儿。

一个老头儿不知被谁的摩托车撞倒了，满脸是血躺在地上，路人不敢相助，我上前抱起他，送他到医院。老头儿的家人来了，硬说是我骑车撞的，如果不相干绝不可能怎么热心。老头儿醒来也含含糊糊点点头。

我像一个孝子每天给老头儿送饭送汤端尿盆，还全包住院费。别人骂我傻蛋，我自己也在心里骂。为此事，携手 10 年的妻子离我而去。你能体会到我的痛苦吗？

我沿街兜售自己的良心。开始，围观的人很多，却没人买。我在胸口挂了个牌子做广告，海吹良心的好处。有几位老年妇女也许出于对我的同情（当时我的模样有几分落魄），向我买了一点。我开价也不高，后来买的人越来越多。

有做生意赚了大钱的，有手握实权的，意外的事，还有一些闹婚外恋的男男女女，他们说，回家要好好善待“原配”。

我很吃惊，当今良心原来这么奇缺。物以稀为贵，我赶紧把价格十倍二十倍地往上翻。关键时刻，我的聪明总会帮上忙。良心一少，我也不那么心软了。

我有时察言观色，漫天要价，吐出一连串迅速上升的数字。

我不在沿街叫卖，我租了一间很气派的门面房，挂起了“良心专卖店”的金字招牌。我跷着二郎腿，捧着一杯茶等客上门——全市独此一家，生意做得真爽。

没了老婆，我有了新的配偶：金钱。我买了一幢小洋楼，一辆白色小轿车，雇了个年轻的保姆兼性伙伴，又开了家酒店，专卖假酒。

因为我良心很少了。

一天，一位穿着土布褂的老实巴交的农民，怯生生地走进我的店，苦着脸说：他老婆生了4个女儿，没给他生儿子，他很气恼，经常打老婆出气。他想买点良心，以后对老婆好一点。我犹豫了半天，便宜卖了一点给他。因为我还有最后一点良心。

就最后这么点良心了，卖还是不卖？我关上店门，苦苦思索了几天。最后还是决定卖，没良心的人还照样活得很得意？

刚开店门，一位仪表堂堂、干部模样的人走了进来，见面便痛哭流涕。

他说他当厂长多年来，用公款吃喝玩乐，没心思料理正事，把厂子弄砸了，工人下岗了。他心里很难受，他想为那些老工人做点好事，给自己赎罪。我说，就剩下最后一点良心了，我打算留给自己。他拉着我的手苦苦哀求，愿出高价买。一听高价，我来了精神，一拍桌子，卖！

正准备关门歇店，上次那位农民又来了，满面哀愁，比上次更憔悴。他说上次买了一点良心后，回家正巧看到瘦弱的妻子挑着一担水，吃力地沿着山坡往回走。他飞快地迎上去，想帮她挑一程。谁知妻子以为丈夫跑过来又要打她，吓得从坡上滚下去，不幸摔死了。他哽咽着说不下去。他想再买一点良心，好好悔过。

我骗他说，只有最后一点了，开价10万，他说我哪有那么多钱，回家卖房子最多能卖两万。我说就两万吧，不过先交订金1000元。他掏遍口袋，只掏出350元，我说就这么着吧。他千恩万谢，趑趄着走了。我暗自窃笑，明天你来，我早走人了。茫茫人海，你哪里寻得到我？反正我已经没良心了。

